



# 日本ワクチン学会 ニュースレター

vol.32

## 目 次

1. 第21回日本ワクチン学会学術集会のお知らせ（第2報）  
第21回学術集会会長 岡田 賢司……………2
2. ワクチン関連トピックス
  - I) 『ムンプスワクチンの定期接種化を』……………神谷 元……………3
  - II) 『水痘ワクチンの帯状疱疹の予防に係る適応について』……………五味 康行……………4
3. 橋爪壮先生を偲んで……………堀内 清……………5
4. 第13回日本ワクチン学会高橋賞・第7回高橋奨励賞のご案内……………6
5. 会員会告
  - 1) 2016年度第2回 Vaccine 誌編集委員会議事録(2016年10月21日)……………7
  - 2) 2017年度第1回 日本ワクチン学会高橋賞選考委員会議事録(2017年4月24日)……………9

## § 第 21 回日本ワクチン学会学術集会のお知らせ (第 2 報)

第 21 回学術集会会長  
岡田 賢司

この度、第 21 回日本ワクチン学会学術集会を 2017 年 12 月 2 日(土)、3 日(日)の 2 日間、福岡国際会議場で開催させていただきます。

一般演題のご応募ありがとうございます。プログラム委員会で、いただいた演題の枠組みを検討しています。現時点でのプログラムの概要をお知らせします。

特別講演の Plotkin 先生と Vidor 先生には、突発的な事件や事故などが生じない限り、福岡まで来ていただけそうです。

教育講演は、「アカデミアから社会へ向けた発信」、「ワクチンの行政・制度」、「免疫不全と予防接種」の 3 題です。

シンポジウム 1 は、「予防接種に関する研究班報告—これまでの成果と今後の課題」と題して 3 つの研究班の研究代表から紹介いただきます。シンポジウム 2 「Systems Vaccinology」では、・ワクチンアジュバント開発研究における新たな評価系・アジュバント含有ワクチンの新しい安全性評価法の開発・粘膜免疫誘

導型結核ワクチンの開発・世界基準の季節性インフルエンザワクチンの開発と実用化となっています。シンポジウム 3 「ワクチンの有害事象を考える」では、・有害事象と副反応・諸外国のワクチン接種後の評価システム・国内の副反応報告システム・アナフィラキシーの評価・ADEM の評価を検討します。シンポジウム 4 「ワクチンの安定供給に向けて—供給・流通・備蓄」では、・ワクチンが不足すると接種現場で何が起こるか・ワクチン製造の立場から・ワクチン流通の立場から・ワクチンの安定供給に向けて(国の立場から)・米国のワクチン安定供給対策を予定しています。

12 月初め、関係者一同”思いやり“の気持ちをこめて、皆様の来福を心よりお待ちしております。ただ、昨今は市内の宿泊状況は社会問題となるほど逼迫しております。安心してお越しいただけるよう、どうぞ早めに宿泊先を確保していただきますようお願いいたします。

## § ワクチン関連トピックス

### トピックス I

#### ムンプスワクチンの定期接種化を

国立感染症研究所感染症疫学センター  
神谷 元

流行性耳下腺炎（以下ムンプス）は、耳下腺の腫脹と疼痛、発熱を主訴とするウイルス感染症である。主な感染経路は飛沫感染で、耳下腺腫脹の6日前から9日後までの間、唾液中へのウイルス排泄がある。潜伏期間は12-24日、基本再生産数（ $R_0$ :100%感受性者の集団で、一人の患者が平均何人の人に感染させるかを表す数字）は11~14とされている。感染後は一般的に予後は良好で全感染例の30~35%が不顕性感染例とされるが、年齢が高くなるほど顕性発症率が高くなり、1歳では20%、4歳以上では90%程度が発症するという報告もある。合併症には無菌性髄膜炎（発生頻度1~10%）や脳炎（同0.02~0.3%）、睪炎、精巣炎などがあり、注意が必要である。また、感音性難聴（ムンプス難聴）は予後不良で、頻度も高く（患者の0.1~0.25%）、発症時期によっては言語発達に影響が出る場合もある。

感染力が比較的強く、ウイルスの感染に伴う症状や合併症に対して特異的な治療はなく、前述のような重い合併症を発症する可能性があるムンプスに対して、ワクチンによる予防は非常に有効かつ効果的である。わが国では現在星野株、鳥居株を用いたムンプスワクチンがそれぞれ任意接種として使用されている。いずれの株を用いたワクチンも高い抗体陽転率（92~100%）、有効性（71~94%：ただし接種後の経過期間や調査対象によりばらつきあり）が示されている。にもかかわらず、過去のワクチン（現在使用されていない）の接種後の無菌性髄膜炎等の問題によりムンプスワクチンは定期接種に含まれていない。現在使用されているワクチンの接種後の副反応に関しては様々な研究、調査がなされ、その有用性は示されている（表）。2012年5月には厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会がとりまとめた「予防接種制度の見直しについて（第二次提言）」において「広く接種を促進していくことが望ましい」7つのワクチンの1つにも含まれた。

感染症発生動向調査の報告では、わが国ではムンプスは4年ほどの間隔で流行を繰り返す（図）、感染者の年齢分布も毎年同様である。任意接種による現状の低い接種率（現在の推定では30~40%）では、集団免疫の獲得という点では限界があることを示している。前回の国内のムンプスの流行は2015年から2016年にかけてであった。このまま過去と同様の周期でムンプスが流行するとすればラグビーW杯やオリンピック・パラリンピック大会が日本で開催される2019~2020年にムンプスの流行が国内で起こる可能性が考えられる。今こそムンプスワクチンの定期接種化について真剣に議論、検討すべきである。

#### 参考文献

- 1) 庵原俊昭：ムンプスワクチン接種後のムンプス罹患時における病態と臨床像の特徴。小児科 42\_1144-1149, 2001

表. ムンプス自然感染の症状とワクチンの副反応

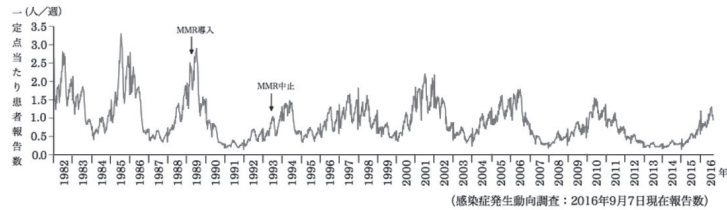
症状	自然感染	ワクチン
耳下腺炎	70%	3%
無菌性髄膜炎		
細胞増多	50%	不明
症候性	3%~10%	1/1,000~10,000
脳炎	0.02%~0.3%	0.4/1,000,000
難聴	1/400~20,000	1/6,000,000~8,000,000
睪丸炎	25%** †	ほとんどなし*
両側腫脹	10%**	ほとんどなし
乳腺炎	15%~30%**	ほとんどなし
卵巣炎	5%**	ほとんどなし
睪炎	4%**	ほとんどなし

第1三半期の妊婦が罹患すると1/4は自然流産する

\*: 詳細な頻度は不明、\*\*: 思春期以降の頻度(小児ではまれ)

†: ムンプス睪丸炎発症者の1.5%に睪丸癌発症

参考文献3)より一部改変(生前に故庵原俊昭先生よりいただいたスライドより抜粋)



- 2) 国立感染症研究所：流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）2016年9月現在．IASR Vol. 37 p.185-186: 2016年10月号
- 3) 庵原俊昭．感染症学各論II．感染症法分類一発症・病態・診断・治療一五類感染症（定点把握）流行性耳下腺炎（ムンプス）．日本臨床 2007;65 増刊 3:380-383.

## トピックスII

### 水痘ワクチンの帯状疱疹の予防に係る適応について

一般財団法人阪大微生物病研究会  
五味 康行

水痘・帯状疱疹ウイルス（varicella-zoster virus; VZV）は、ヘルペスウイルス科に属し、その名の通り、水痘（水疱瘡）および帯状疱疹という二つの疾患の原因となるウイルスである。VZVの初感染による臨床像は水痘であり、感染したVZVは水痘の経過中に、水疱部位の知覚神経末端から上行性の経路で、またはウイルス血症を起こすことで血行性の経路で、脊髄知覚神経節や三叉神経節に達して潜伏感染する。何らかの要因により宿主のVZVに対する特異的免疫が低下すると、潜伏していたVZVが再活性化し、潜伏神経細胞の支配領域の知覚神経に沿って帯状疱疹を引き起こす。

乾燥弱毒生水痘ワクチン（以下、本製品）は、水痘の予防に使用することを目的に1986年9月に承認を取得したものである。本製品は、弱毒生水痘ウイルス（岡株）をヒト二倍体細胞（MRC-5細胞）で培養増殖させ、得られたウイルス浮遊液を精製し、安定剤を加えて充填した後、凍結乾燥した製剤である。

水痘は一般に軽症で経過するが、急性白血病などの悪性腫瘍患者や治療等により免疫機能に障害をきたしている者では重症となり、致命的となることも少なくない。本製品はこのような、いわゆる水痘ハイリスク患者を対象に臨床試験を行い認可されたワクチンである。その後、接種対象者は次第に広がり、水痘の予防を目的に健康小児への接種が中心となった。2014年10月に本製品は定期接種となり、生後12月から生後36月に至るまでの者に対し、3月以上の間隔において2回の投与が行われている。

以下に、本稿の趣旨である「弱毒生水痘ワクチンの帯状疱疹の予防に係る適応」に関して、承認に至るまでの経緯を記載する。

上述のように、VZVは帯状疱疹の原因となるウイルスでもあることから、従前より水痘ワクチンを帯状疱疹の予防にも利用することが考えられていた。米国においては、本製品のマスターシード（岡株）を起源とする弱毒生水痘ワクチンが1995年より製造・販売されているが、同シードを起源とする弱毒生水痘帯状疱疹ワクチンの開発も行われ、2006年に米国医薬食品局（FDA）の承認を受けた。現在、この帯状疱疹ワクチンは、米国や欧州を含む多くの国で承認されている。

本邦では、2009年11月に日本皮膚科学会、2010年4月に日本ペインクリニック学会、2012年2月に日本感染症学会から、本製品の帯状疱疹の予防に係る適応の追加を求める要望書が提出された。また、第5回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会研究開発及び生産流通部会（平成25年10月31日開催）で「開発優先度の高いワクチンについて」という議題で議論がなされ、その後、「予防接種に関する基本的な計画」（平成26年3月28日健発0328第1号）において、医療ニーズや疾病負荷等を踏まえて、帯状疱疹ワクチンは開発優先度の高いワクチンに指定された。

このような背景のもと、本製品の帯状疱疹の予防に係る適応について承認を得るため、「適応外使用に係る医療用医薬品の取扱いについて（平成11年2月1日付研第4号・医薬審第104号）」に基づく公知申請注を行った。「審査専門協議」及び「薬事・食品衛生審議会 医薬品第二部会」で検討・評価がなされた結果、本製品は、本製品のマスターシードを起源とし、米国や欧州で承認されている帯状疱疹ワクチンと本質的に同じ薬剤であることなどから、帯状疱疹の予防に対する有効性及び安全性が医学薬学上公知であると認められた。2016年3月18日に「50歳以上の者に対する帯状疱疹の予防」に対する「効能・効果」が追加承認された。

注）公知申請：医薬品（効能追加など）の承認申請において、当該医薬品の有効性及び安全性が医学的に公知であるとして、臨床試験の全部または一部を新たに実施することなく承認申請を行うことができる制度。

平成 29 年 5 月 18 日

## § 橋爪壮先生を偲んで

ケルビムこどもクリニック  
院長 堀内 清

謹んで、故「橋爪壮」先生の御逝去を悼み、追悼文を捧げます。

先生は大正 15 年 3 月 18 日静岡市内で医家を営まれる司馬家の 7 人のお子様の末っ子として出生されました。初等・中等・高等教育を地元で修業され、戦後の教育制度の変更により旧制中学から変わった新制静岡高等学校を卒業されました。昭和 23 年旧制千葉医科大学に入学され、昭和 27 年卒業、28 年医師国家試験に合格されました。その後、千葉大学医学部細菌学教室の研究生となり、川喜多教授の下でウイルス学と細胞培養を研究され、昭和 35 年に医学博士号を取得されました。同年、千葉県血清研究所の組織培養部ポリオ室長に就任され、先生のワクチンの研究生生活は本格化し、ポリオソークワクチンの開発に従事され、同時にセービン生ワクチンの国産化に取り組みられました。当時の日本はワクチン開発の黎明期にあたり、痘瘡、ポリオ、麻疹の根絶が WHO の勧奨により、官民一体となりワクチンの開発に努めておりました。厚生省は国立予防衛生研究所を中心に、国内メーカー、研究者、臨床医を一体とした種痘研究班を立ち上げ、研究を進めた結果、世界に誇れる成果をもたらしました。特に痘瘡部門では先生が千葉血清で開発された弱毒細胞培養痘瘡ワクチン(LC16 m 8)は今でも世界中で備蓄されております。私は小児科医として本研究班に参加し、乳幼児への種痘の臨床部門開発に携わっておりました。先生との関わりはこの時代からで、その後先生の御推薦を受け平成 3 年に千葉血清へ転身した時には先生は研究所を退職され、千葉大学看護学部教授(昭和 51 年)に就任されておりました。千葉大学細菌学教室は世界に誇る VERO 細胞を開発される等、ウイルス学の発展に貢献しており、特に先生は培養温度と細胞の組み合わせで、ウイルスの弱毒株を作製する発想を持たれ、この手法は千葉血清の知的財産として受け継がれておりました。残念ながら研究所は平成 15 年に閉鎖となりました。また、先生は STD の原因であるクラミジア感染症に興味を持たれ、研究を進められ、千葉血清では先生のご指導で、血清の IgA、IgG 抗体を EIA 法で迅速診断する検査キットを開発し、欧州各国に輸

出するほどの製品でした。また先生は沢山の若手のクラミジア研究者を育てられ、千葉市内の STD 患者の減少につながる啓蒙活動にも力を入れておられました。平成 3 年、千葉大学を定年退官され、名誉教授の称号を授与され、同年日本ポリオ研究所常務理事に就任されました。当時、生ワクチンに因るワクチン由来ポリオの発生が問題になっており、ポリオを根絶した先進国では不活化ワクチンの接種が進められておりました。欧米ではワクチンに野外株を使っておりましたが、製造工程が極めて厳重な管理下での作業が必要になります。日本ポリオ研究所では安全性を考え、セービン株を不活化したワクチンを開発しました。当初欧米諸国から予防効果に疑念が持たれましたが、WHO との共同検証により問題がないことが証明され、現在わが国では DPT と混合した 4 種混合ワクチンとして定期予防接種に使われております。

さて、先生には 50 年以上の長い間、公私に及ぶ御交誼を賜りました。特に御酒とゴルフは御一緒する機会が多く、特に臨床ウイルス学会の懇親ゴルフのお世話をしていた関係で、東西の研究者の交流に尽くせたことが懐かしい思い出の一つです。御酒は日本酒の地酒がお好きで、行きつけの千葉市内の酒場には度々お供致しました。また大変な愛煙家で体調を崩され入院を勧められても、煙草が吸えないと言われてお断りしておりました。しかし御逝去の折は御家族に見取られ安らかな最後であったとお聞きしております。因みに先生が橋爪姓になられたのは、御母堂様の家系を継がれ御養子となられた為です。優れた業績を上げられ、多くの知人やお弟子に慕われた先生のお人柄を偲び追悼文と致しました。末尾になりますが、紙面に制約があるため、十分に思いを書くことができませんでした。お許し下さい。

最後に「高啓院正博士壮厳格居士」様の御冥福を祈り追悼の言葉と致します。合掌  
(追記) 菩提寺は臨済宗『興禅寺』です。どうぞお参り下さるようお勧め致します。

〒 108-0072 東京都港区白金 6-14-6

☎ 03-3473-0602

# § 2018 年 日本ワクチン学会第 13 回高橋賞・第 7 回高橋奨励賞 応募要綱

2018 年日本ワクチン学会第 13 回高橋賞・第 7 回高橋奨励賞の候補者を公募いたします。応募希望者は下記の要綱に従ってご応募下さい。

応募期間：2017 年 11 月 1 日（水）～2018 年 3 月 30 日（金）必着

※必ず配達記録の残るものでご応募下さい。

応募書類送付先：〒 169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号新宿ラムダックスビル  
（株）春恒社学会事業部内 日本ワクチン学会係  
TEL：03-5291-6231/FAX：03-5291-2176

## 1. 本賞の趣旨

日本ワクチン学会高橋賞は、高橋理明先生の開発された水痘ワクチンが、財団法人（現 一般財団法人）阪大微生物病研究会によりほぼ全世界で実用化された事を記念し創設された。創設にあたり、同財団より高橋記念基金が当学会に寄贈された。日本ワクチン学会高橋賞は、本学会の創立趣旨に沿って学問的・実学的に卓越した貢献をされた方を授賞の対象とする。

## 2. 対象者

- 1) 本賞は本学会の創立趣旨に沿ってワクチンに関する基礎研究、臨床応用、製造開発、疫学研究において卓越した貢献をされた方を授賞の対象とし、学術功労賞である「高橋賞」と、若手奨励賞である「高橋奨励賞」の二つの賞を設置する。
- 2) いずれの賞も原則として本学会会員とする。
- 3) 「高橋賞」は、年齢制限を設けない。若手奨励賞である「高橋奨励賞」は 2018 年 1 月 1 日時点で 45 歳未満の者を対象とする。

## 3. 応募方法

以下の書類を揃えて（株）春恒社学会事業部内 日本ワクチン学会係まで、2018 年 3 月 30 日（金）までに必着でお送り下さい。

- 1) 本会所定の申請書【原本とコピー 7 部を添付】
- 2) 研究業績の要約（高橋賞 2,000 字以内、高橋奨励賞 1,000 字以内）【原本とコピー 7 部を添付】
- 3) 研究業績リスト（別紙 1 枚以内）【原本とコピー 7 部を添付】
- 4) 関連研究業績別刷（5 編以内）各 8 部
- 5) 自薦の場合には本人の研究についての抱負、他薦の場合は本学会会員の推薦状 1 通（双方ともに A4 版 1 枚まで）【原本とコピー 7 部を添付】
- 6) 本会における業績目録本会学術集会での発表歴（筆頭のみ）、論文発表（本会 Vaccine 誌編集委員会の査読を受けたものに限ります）のいずれかまたは両方を記載してください。業績目録に併せて、学術集会プログラム抄録集の申請者の発表（講演）が掲載されているページのコピー、論文の最初のページ（題名と執筆者が記載されている）のコピーを添付してください。

※高橋賞は 1)～5) までを 1 セットとし、計 8 部を送付すること。

※高橋奨励賞は 1)～6) までを 1 セットとし、計 8 部を送付すること。

※研究業績の要約の文中に、関連論文（研究業績リスト）の論文番号を記入すること。

※応募書類は、当学会ホームページ（<http://www.jsvac.jp/>）よりダウンロードすること。

#### 4. 選考と発表

- 1) 選考は理事長に加えて理事会で承認された学会員6名の合計7名で構成する選考委員会で行い、委員会での決定事項は理事会での承認を必要とする。  
なお、受賞者が選考委員会で決まらなかった場合は理事全員の意見を求める。
- 2) 受賞は原則毎年3名とし、高橋賞1名、高橋奨励賞2名とする。
- 3) 日本ワクチン学会総会にて理事長より盾及び副賞（高橋奨励賞は賞状及び副賞）を授与する。
- 4) 高橋賞および高橋奨励賞受賞者は総会において記念講演を行うとともに当学会が指定する刊行物に総説を発表する。
- 5) 高橋奨励賞受賞者は翌年度の Vaccine Global Congress の JSV 枠プログラムに参加し発表を行うことが望ましい。
- 6) 受賞者には2018年8月末までに通知を行う予定。

以上

---

## § 2016年度第2回日本ワクチン学会 Vaccine 誌編集委員会議事録

日 時：2016年10月21日（金）15：00～16：30

場 所：TKP 東京駅丸の内会議室（帝劇ビルB1）ミーティングルーム B

出席者：西條政幸（委員長）、森 康子、城野洋一郎、多屋馨子、中野貴司、中山哲夫、西村直子  
（事務局）稲田、松村

欠席者：石井 健、大石和徳、谷口清州

### 1. 前回議事録の確認

西條政幸委員長から前回議事録についての報告がされ、修正事項があれば本委員会終了までに申し出るよう要請があった。申し出はなく承認された。

### 2. 今後の掲載予定・執筆依頼について

前回委員会からの依頼論文の進捗状況の確認を行い、以下7編がエルゼビア社に入稿された。

- 1) No.100 庵原俊昭先生 / 吉川哲史先生（第19回シンポジウム1）より  
「ワクチン発展のために臨床家は何かができるか」
- 2) No.101 渡辺正博先生（第19回学術集会）より  
「水痘・ムンプス・ワクチン接種後罹患の診断をどうするか～適正なサーベイランスをもとめて～」
- 3) No.102 西村直子先生（第19回学術集会）より  
「病院勤務医から研究者へのフィードバック – 一人から得られる大切なエビデンス –」
- 4) No.103 吉川哲史先生（第19回学術集会）より  
「ワクチン発展のために臨床家はなにができるか：大学臨床教室の役割」
- 5) No.104 城野洋一郎先生（第19回学術集会）より  
「ワクチンメーカーとして臨床家に期待すること」
- 6) No.108 中山哲夫先生（第19回学術集会）より「詳しいメカニズムはわからないけど」
- 7) No.113 武下文彦先生（第19回学術集会）より「第20回学術集会アナウンスメント」

今後の執筆依頼は以下17編にすることとした。

- 1) 岡田賢司先生（第20回学術集会）より「第21回学術集会アナウンスメント」
- 2) 河岡義裕先生（第20回学術集会特別講演）より「インフルエンザならびにエボラワクチン」
- 3) 大藤さとし先生（第20回学術集会高橋奨励賞記念講演）
- 4) 鈴木忠樹先生（第20回学術集会高橋奨励賞記念講演）
- 5) 石井健先生（第20回学術集会シンポジウム1）より  
「アジュバントによるワクチンデザインと免疫療法への展開」
- 6) 櫻井和明先生（第20回学術集会シンポジウム1）より  
「多糖βグルカンを使った免疫細胞へのデリバリーシステムの構築」
- 7) Alaian Breca（第20回学術集会シンポジウム1）より  
「Current status on the development of GSK investigational herpes zoster HZ/su vaccine」
- 8) 清野宏先生（第20回学術集会シンポジウム1）より  
「カチオン化ナノゲルデリバリーシステムを用いた次世代型経鼻ワクチンの開発」
- 9) 長谷川秀樹先生（第20回学術集会シンポジウム1）より  
「経鼻インフルエンザワクチンと分泌型IgA抗体」
- 10) 松浦善治先生（第20回学術集会シンポジウム1）より「バキュロウイルスを用いたワクチン開発」
- 11) 中山哲夫先生（第20回学術集会シンポジウム1）より「ワクチン抗原で誘導される免疫能の検討」
- 12) 浦野勉先生（第20回学術集会シンポジウム2）より「感染症予防ワクチンの承認審査と課題」
- 13) 古川和明先生（第20回学術集会シンポジウム2）より  
「細胞培養新型インフルエンザワクチン原液の生産プロセス開発とスケールアップ」
- 14) 山西弘記先生（第20回学術集会シンポジウム2）より「ワクチンの品質保証」
- 15) 岡田直貴先生（第20回学術集会シンポジウム2）より「経皮ワクチン製剤の実用化に向けて」
- 16) 大島英彦先生（第20回学術集会シンポジウム2）より  
「皮内注射専用デバイス(Immucise)の実用化」
- 17) 岡部信彦先生（第20回学術集会シンポジウム3 & 特別企画）より  
「予防接種法改正後のフォローアップ・国民のための予防接種のあり方」

### 3. エルゼビア社との契約更新について

エルゼビアとの契約が2015年までとなっていたので、後日事務局が確認することとした。契約更新の際には、従来から掲載してきた「総説」や「学会発表のまとめ」の記録（論文）を掲載することを旨とするものの、原著論文も掲載できるようにするために契約内容を修正（掲載される論文は従来の契約では「peer reviewed review article」とされているところを新規の契約書では「peer reviewed article」に修正できないか先方（The Journal）と相談することとした。JSV 枠を従来通りの50ページにする内容とすることが西條委員長より提議され各位了承した。理事会に報告することとした。

以上

2016年10月21日  
Vaccine 誌編集委員会  
委員長 西條 政幸



# § 2017 年度 第 1 回 日本ワクチン学会 高橋賞選考委員会議事録

日 時：2017 年 4 月 24 日（月）13：00-14：00

場 所：AP 品川アネックス 1F ルーム C

出席委員：岡部信彦（委員長）、大石和徳、岡田賢司、神谷 元、谷口孝喜、西村直子

欠席委員：城野洋一郎

事務局：稲田

はじめに、岡部信彦委員長より開催条件の確認と高橋賞・高橋奨励賞設立の経緯についての説明がなされた。

## 1. 高橋賞選考

### 1) 応募者について

岡部信彦委員長より高橋賞応募者について以下の通り報告された。

■第 12 回日本ワクチン学会高橋賞候補者（1 名）

中山 哲夫先生（北里大学 北里生命科学研究所 特任教授）

「ワクチンの安全性に関する研究」

推薦者：尾崎隆男先生（江南厚生病院こども医療センター 顧問）

### 2) 業績紹介・審議について

岡部信彦委員長より推薦書類・応募書類を基に業績紹介がなされ、欠席委員の事前審査コメントの確認が行われた。審議を行った結果、中山哲夫先生を第 12 回高橋賞受賞候補者として理事会に推薦することとした。

## 2. 高橋奨励賞選考

### 1) 応募者について

岡部信彦委員長より高橋奨励賞応募者について以下の通り報告された。

◆第 6 回日本ワクチン学会高橋奨励賞候補者（2 名）

一戸 猛志先生 東京大学医科学研究所 准教授

「アジュバント併用経鼻インフルエンザワクチンに関する研究」

推薦者：長谷川 秀樹先生（国立感染症研究所感染病理部 部長）

水上 拓郎先生 国立感染症研究所血液・安全性研究部第 4 室 室長

「インフルエンザワクチン及びアジュバントの新規安全性評価法の開発」

推薦者：浜口 功先生（国立感染症研究所血液・安全性研究部 部長）

### 2) 業績紹介・審議について

期日までに応募が無かったため、書類応募期間延長を行った。そのため事前審査ができていない。両名には学術集会での発表歴を提出いただき、その業績を鑑みて後日持ち回りにて決定することとした。

なお次回公募時から、業績の提出とともに、本学会での紙上発表、学会発表等、本学会での活動についての記録を求めることとした

以上

2017 年 4 月 24 日  
日本ワクチン学会高橋賞選考委員会  
委員長 岡部 信彦

---

日本ワクチン学会ニュースレター 第32号  
2017（平成29）年8月28日発行

発行人 日本ワクチン学会

日本ワクチン学会事務局  
〒210-0821 神奈川県川崎市川崎区殿町3-25-13  
川崎市健康安全研究所  
日本ワクチン学会理事長 岡部 信彦  
<http://www.jsvac.jp/>  
<学会連絡先・入退会・住所変更・年会費>  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号  
新宿ラムダックスビル  
(株)春恒社 学会事業部内  
日本ワクチン学会係  
TEL：03-5291-6231/FAX：03-5291-2176/ E-mail：jsvac@shunkosha.com